

外を2 野館て 国物ね 英博訪

前号の「たてもの園だより」でご報告したように、江戸東京たてもの園では海外の野外博物館との連携を深める活動の一環として、昨年、英国の代表的な野外博物館4施設を視察いたしました。

前号では各博物館の概要をご紹介しましたが、今回は、建物、風景、修復のあり方などについて、印象に残った特徴をご紹介します。

チルターンと同様、ボランティアの役割が非常に重視されており、過去の生活スタイルや草刈りの方法まで忠実に再現して来館者に見てもらいような活動も彼らは行っています。広大な敷地に対し、移築されている建物は50棟ほどですが、ウィールド（平地）とダウン（丘）の地名のごとく起伏に富んだ地形と森が、点在する建物と相まって美しい「風景」を醸成しており、ここが博物館であることを忘れてしまうような情感に満ちた体験を与えてくれます。

エイボンクロフト野外博物館

写真 3

オーケストラで有名なイギリス第二の都市バーミンガム近郊のブROOMスグロップにあります。1946年のプレハブ住宅や、コルゲート板で造られた教会など、20世紀の建物を多く移築している点はたてもの園と共通する特徴で、収蔵建造物の数も32棟と、やはりたてもの園（30棟）に近似しています。

非常に興味深いのは、建物を修理した際、新材に置き換えた部分をはっきりわかるようにしている（古色がけなどの演出を施さない）点です。これはエイボンクロフトだけでなく、英国の他の施設でも共通の方法であり、後世の人がその建物を見た時に、竣工当時から部材とそうでない部材が峻別できるように配慮しているのです。たてもの園でも建造物の保全・補修が今後大きな課題となっていくますが、こうした英国の取り組みは、非常に参考になりました。

セント・ファガンズ国立歴史博物館

写真 4

ウェールズの州都カードیفの郊外にあるイギリス最大の野外博物館で、1948年開館という長い歴史を誇っています。敷地の全面積はなんと100エーカー（約40万㎡）というきわめ



② 詩情あふれる風景



① 牛や豚も「物語」の一部として飼育されている



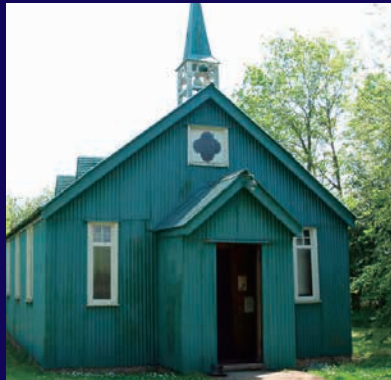
② 18世紀以前の草刈りを再現している



① ボランティアによる屋根の葺き替え風景



③ 新材（明るい部分）がはっきりとわかるような修理方法



③ コルゲート板で造られた20世紀の教会



④ 鍛冶屋の実演



④ ファガンズ城の夕景

チルターン野外博物館

写真 1

ロンドンのメルルボーン駅から約30分、シャルフオントラティメール駅からバスで15分ほどの場所にあるチルターン野外博物館。1976年に開園した比較的新しいこの野外博物館は、チルターン地方の建物を移築・保存し、現在では34棟の収蔵建造物を有しています。

同館は、建物だけでなく、人、生活、地形、動物、植物といったあらゆる対象を保存しながら「チルターン地方の物語」を紡ぎ、受け継いでいくというユニークなコンセプトを持っています。8名の若いトレーニー（研修生）がボランティアたちと協力した信頼関係を築きながら、日々の博物館活動を支えています。建物の修復についても、草屋根の葺き替えにいたるまで、基本的にすべてボランティアが行っているというのは驚きでした。屋根葺きの技術的な面は、日本の民家で葺き替え作業をしたこともあるというボランティアの男性指揮のもとに行われています。彼によれば、小麦殻と葦を使い分け、小麦殻なら20年、葦なら70年という風に、耐久性を計算して作業にあたっているということでした。

ウィールド・アンド・ダウンランド野外博物館

写真 2

ロンドン、ビクトリア駅から2時間、イギリス南部の小都市チチェスターの郊外ウィールド・アンド・ダウンランドにある博物館です。50エーカー（約20万㎡）という広大な敷地に建物を移築するだけでなく、約1万3千点の大工道具や古民家の部材、建具などを収蔵・保管している、まさに「建築総合博物館」です。子どもたちへの建築教育を重視したワークショップを頻繁に開催している点は、子どもの関心を育むような建築教育プログラムが不足している日本にとって、大いに参考になるでしょう。

て広大なもので、その1／3をファガンズ家の邸宅・庭園が占めています。この「ファガンズ城」だけでも相当に見ごたえがありますが、野外にはさらに、農家をはじめパン屋、粉ひき所、鍛冶屋、教会、20世紀の店舗など多種多様な建物が移築されています。各時代における「ウェールズ人の生活」を再現することが徹底されており、家具や民具の忠実な再現に加え、伝統的な技術を用いたボランティアの実演が実にリアルな印象を与えます。このような建物内部の再現の緻密さは、通常の博物館とは一線を画すものであり、建築史学、民俗学、考古学など各分野の研究のたまものだといえるでしょう。

以上2回にわたり、英国野外博物館の魅力の一端をご紹介しました。さらに詳しい報告を『東京都江戸東京博物館紀要 第6号』に寄稿しましたので、そちらも併せてご覧ください。

（研究員 米山勇）